

夏目漱石の「巴里・倫敦」考

— 明治知識人の「西洋」との邂逅と相克 —

福永勝也

1. 美と思索と憂愁が凝縮された「花の都」に誘われる エトランゼたち

花の都「巴里」に憧れを抱き、その華麗な姿に心酔する人は古今東西、数知れない。この街はモンマルトルの「白」の天才画家ユトリロが描き、ボードレールが「憂愁」を詠み、哲学者サルトルが「実存」を思索するなど、世界に冠たる芸術と学術、文化の都である。

他方、既存の観念や価値観、体制に対して容赦のない“知的反抗”の狼煙を上げ、グローバルな先鋭性と前衛性が光を放つ「革命の都」という顔も持ち合わせている。それに加えて、この街はアンシャンレジームに巢食う国際権力の権謀術数が、水面下で妖しく蠢く世界史の舞台でもあった。

その意味において、パリはその名を世界中に轟かせる一大芸術文化センターとして、進取の気性に富んだ若者たちの胸を熱く焦がす「妖精」であると同時に、魑魅魍魎の世界に跋扈する権力志向の輩たちの魂を虜にして離さない「女王蜂」のような存在でもあった。

パリの中心に屹立する白亜の凱旋門に登って、眼下に広がる緑の木々に彩られた優美な街並みを望観していると、何処からともなくエディット・ピアフの情感あふれる歌声が、そしてこの地で類まれなる才能を開花させたモーツァルトやワグナー、ショパン、ベルリオーズたちの感動的な旋律がプラタナスの香りに乗って耳に響いてくるような錯覚に襲われる。また、瞼を閉じると、その暗闇から艶やかに彩られたセザンヌやモネなど印象派

の自然風景が、まるで幻影のように浮かび上がってくるから不思議である。

それに加えて、放射線状に立ち並ぶ造形美の極地ともいべき歴史的建造物群と、それらの谷間で陽光を眩しく反射する緑の木々が、この街の情景をまるで1枚の名画でも見るかのような雰囲気醸し出している。そして、映画の1シーンを想起させるようなこの街中に身を置き、道行くパリジェンヌやパリジャンたちの姿を目で追い、あるいは洒落たカフェで交わされる彼らの会話に耳を傾けていると、自身が映画の登場人物であるかのような幻想に囚われる。実際、人々の表情や挙動を無心に眺めていると、それぞれが心の中に抱いている愛憎や怨嗟、悲嘆、憂愁といった人生劇場が透けて見えるような気がしてくる。パリはやはり「特別な街」なのである。

それ故、パリに夢と憧れを抱いた世界中のボヘミアンたちがこの地に吸い寄せられるのだが、それは古今を通して変わらない。晩年、フランス国籍を取得した日本人画家、藤田嗣治を例に出すまでもなく、「花の都」にやって来たエトランゼたちは、この街を「永遠の理想郷」と信じて疑わなかったのである。

このように、世界の都市の中でも抜きん出た魅力と、訪れる者を拒まない底抜けの開放性や包容力ゆえ、パリはニューヨークやロンドンとは一味違う文明的な「コスモポリタン・シティ」¹として敬われる。つまり、この街は人間の自由な思考や思想を束縛する「国籍」という重力から、人々を解放してくれる別天地なのである。

「季節ごとに千人の新人画家、五百人の新人作曲家、百人の新人哲学者が生まれる」——これはリュシアン・ルバテの言葉だが、この街にとって芸術文化はまさに命を紡ぐ血液であり、栄養剤といっても過言ではない。また、鋭い社会観察で定評のあるルイ＝セバスチャン・メルシエも「パリは文人の祖国、唯一の祖国なり」「才気ある人をあれほどうんざりさせる田舎風な束縛も、窮屈さも、挨拶も、礼法もない」、そして「パリに生まれるということは、二倍フランス人であるということだ」と、この街で暮

らすことを何物にも代え難い貴重な価値と礼讃している。⁽¹⁾

フランス人の思考様式の根本にはデカルト的な理性や合理主義があるとされるが、このルネ・デカルトは「われ思う、ゆえにわれ在り」で有名な著書『方法序説』(1637年)と『情念論』(1649年)において、人間理性(デカルト的理性)こそが社会の最高の審判者と説いている。それ故、彼は「近代哲学の始祖」あるいは「西洋世界の知」と高く評価された。パリという街には華やかな芸術文化とは別に、このような思慮に富んだ思想や哲学が根付いており、それが哲学カフェなどに象徴されるように大衆化しているところでもある。

また、この街には歴史によって培われてきた古典的ロマン主義が、今日においても厳然として芳香を放っている。フランスロマン主義を代表する者として、散文詩『パリの憂愁』で「ダンディズムは、頹廢の世における英雄性の最後の輝き」「ダンディズムは精神のお洒落」と高らかに謳ったボードレル、さらに上田敏の「秋の日の ヴィオロンの…」「ちまたに雨の降るごとく、わが心に涙ふる」という名訳によって、日本で一躍、その名を轟かせた象徴派詩人のヴェルレーヌといった人々の存在も忘れてはならない。

さらに、第二次大戦後の知的世界を実存主義によって切り拓いたジャン＝ポール・サルトルやシモーヌ・ド・ボーヴォワール、そして不条理や反抗の哲学者として歴史に名を刻んだ『異邦人』のアルベール・カミュたちの存在も特筆すべきだろう。彼らの時代を切り拓く先鋭性や濃密な大衆性、さらに卓越した社会性や政治性、国際性が、世界の知識人ばかりか、フランス国内の大衆に対しても刺激的な知的影響を与えたことは疑うべくもない。

このように、新旧織り交ぜた綺羅星のごとく光り輝く知的勇士たちの存在があったからこそ、この街で醸成された近代合理主義思想が伝統的な哲学や文学、美学などと陰に陽に絡み合い、融合することによって、世界に類例を見ない圧倒的な魅力を誇るフランス文化を構築して行ったのである。

当然のことながら、この街に魅惑され、その磁力に吸い寄せられてパリにやって来た日本人は、古来、枚挙に暇がない。その多くが若き芸術家志望であったが、絢爛たるフランス文学に心を奪われて大海を渡り、あるいはシベリア大陸を横断して、遠路「巴里」に馳せ参じた文学者や作家もいる。

その中には、日本において既に名を成した文豪たちの姿もあった。米国留学の後、1908年(明治41)に熱病の如く恋焦がれてこの街にやって来た永井荷風や、1913年(大正2)、姪との許されざるスキャンダルから逃れるために故国を後にした島崎藤村。そして1936年(昭和11)には、荷風や藤村とは異なる眼差しで東洋と西洋の文明的葛藤と相克を自身の目で確かめようと、横光利一がこの街を訪れている。

そのほか、ロダンに憧れた高村光太郎や正宗白鳥、金子光晴、林芙美子、与謝野晶子、遠藤周作、伊藤整といった明治、大正、昭和を代表する錚々たる文豪たちが、相次いでこの地を踏んでいる。彼らはこの地で一体、何を目撃し、何に感動し、何を日本に持ち帰ったのであろうか。

これらパリを訪れた文豪たちの中で、世間にあまり知られていないのが夏目漱石(当時は夏目金之助、本稿では留学中を含めて「漱石」で統一)の存在である。彼は留学先であるロンドンに渡る前、パリに8日間滞在している。当時、パリでは万国博覧会が開催されており、漱石はエッフェル塔に登った後、連日のように万博会場を見て回り、そこで西洋の芸術文化を目の当たりにして強い衝撃を受ける。

他方、パリを後にして漱石が訪れた留学先のロンドンは、華やかなパリとは趣が異なり、資本主義を体現した巨大産業都市であった。つまり、7つの海を支配する大英帝国のエンジンのような存在で、“華”が乱舞するパリとは違って、煙と煤に覆われた巨大な“工業モンスター”であった。

当時の英国はビクトリア王朝期で、当時、すでに衰退の兆しが見え始めていたとはいえ、「大英帝国」の呼称が示す通り、世界一の大国として君臨していたのである。明治の日本が、英国を富国強兵の国造りの範とした

のも、当然といえば当然であった。

いずれにせよ、漱石にとってロンドンの地は、万博見学のための通過点に過ぎなかったパリと比べると、あまりにも産業本位で、権威主義的で、無粋、さらに気候の影響があるにせよ、街の雰囲気は陰鬱で、パリのような華麗さに著しく欠ける“嫌悪すべき街”だったのである。

2. 気の進まぬロンドン入りの前に「パラダイス」を体験した漱石

夏目漱石は英語研究のため、文部省から英国留学を命じられたが、ロンドン到着の8日前、世紀末の爛熟文化が咲き誇るパリに到着し、そこで初めて西洋文化に触れ、いたく感動する。そして、その感激と歓喜が大きければ大きいほど、自身がフランス語を喋れないことの口惜しさを痛感することになる。

それについては、本稿の後段で言及するが、英国留学中、文部省に対して唐突に「フランス留学」を願い出たこととも無縁ではない。それと併せて、英国からフランスへ方向転換する“毀誉褒貶”は、後の世に喧伝される漱石の「英国嫌い」とも無関係ではない。

夏目漱石こと金之助は、1889年(明治22)年に正岡子規と交誼を重ね、子規の『七艸集』を漢文で批評した際、「漱石」の号を用いたのがそのペンネームの由来である。2人はともに東京帝国大学に進学し、漱石は1893年(明治26)に英文科を卒業している。

当時の日本では、外国文学としてはロシア文学やフランス文学、ドイツ文学が人気を誇っており、ロシア文学の領域では二葉亭四迷の『浮雲』や幸田露伴の『五重塔』、さらにドイツ文学のジャンルでは留学から帰国したばかりの森鷗外による『舞姫』などが話題を浚っていた。一方、漱石の専門領域である英文学では、シェークスピア作品の翻訳で知られる坪内逍遙がいたが、総じてマイナーな存在だった。

漱石は、ドイツ留学から帰国した鷗外の小説『舞姫』にいたく感動して絶賛するが、一方、子規は「新帰朝者に特徴的な西洋的作風に過ぎない」と酷評して貶している。そして、子規はこの作品を絶賛した漱石の文学評も併せて手厳しく批判したため、漱石は後に子規に詫びを入れている。このような経緯を斟酌すると、当時の子規・漱石の関係では、子規の方が優位だったことが窺われる。

この子規による鷗外批判の根底には、洋行帰りに多い“西洋かぶれ”に対する嫌悪感があったと思われる。しかし、1896年(明治29)1月3日に子規と漱石、鷗外の3人が愛媛県松山の子規庵で歓談している事実を斟酌すれば、3者の間で文学に対するアプローチに多少の相違があったにせよ、互いにその才能を認め合っていたことは想像に難くない。

この鷗外、1884年(明治17)から88年(同21)にかけてドイツに留学したが、それは漱石の英国留学の16年も前のことである。一方、子規はその病気ゆえ、不幸にも天才的な才能を十分発揮することなくこの世を去るが、残った漱石と鷗外はその後、卓越した文学的才能と幅広い学識、さらに芸術に対する深い造詣も相俟って、明治から大正期におけるわが国文学界の巨頭として君臨する。

漱石は1896年(明治29)に熊本の第五高等学校の講師として赴任し、同年、教授に就任する。そして、その4年後の1900年(明治33)5月、文部省から「英語研究」を目的とした国費による英国留学(2ヵ年)を命じられる。

しかし、漱石は英国に留学するなら、「英語研究」ではなく「英文学研究」と密かに心の中で決めていた。そして、その旨を文部省に訴えるが、それが拒否されると、彼は間髪を入れずに「辞退」という拳に打って出る。当時としては、まことに異例の行動という他ないが、漱石がここまで反発するには、それなりの理由があった。

漱石が卒業した東京帝国大学英文科では当時、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)が教壇に立っていた。しかし、文部省はそう遠くない将来、ハーンを辞めさせて、その後任に生え抜きの日本人を抜擢するという青写

真を描いていた。このような英語教育に関わる人事計画には、多分に当時の国策が反映されていたと思われるが、その後任候補の1人として漱石の名が挙がっていたのである。

つまり、漱石はハーンの後任として教壇に立つ可能性があったわけだが、英語が母国語であるハーンの後に「英語」の教鞭を執ることは、日本人である漱石にとっては発音も含めて大きなハンディに思われた。

ただ、自身の専門領域を考えると、英国留学は魅力的である。そこで、ハーンと単純に比較されず、しかも関心を抱いている文学を勉強するということも兼ね合わせて、英国留学の目的を文部省が指定した「英語研究」ではなく、「英文学研究」に変更してほしいと要望したのである。しかし、このような個人的な要望が受け入れられるはずはなく、文部省がそれを拒否すると、頑固一徹の漱石は「それなら留学はしない」と反撃に打って出たのである。このような両者の間の険悪な事態を打破したのが当時の漱石の上司である五高校長で、彼は漱石の直情を諫め、留学拒否に対して翻意を強く促す。結局、その説得が功を奏して、漱石は不本意ながらも渋々、英国留学を承諾したのである。

この経緯について、漱石は著書『文学論』の序文において、無念さを色濃く滲ませた次のような一文を掲載している。「余は特に洋行の希望を抱かずといふまでにて、固^{もと}より他に固辞すべき理由あるなきを以て、承諾の旨を答へて退けり」「余の命令せられたる研究の題目は英語にして英文学⁽²⁾にあらず」。

要するに、何が何でも意地になって英国留学を拒否するという合理的理由が見当たらない以上、研究テーマが意に添わぬものであっても、とにかく行くことにしたという“恨み節”、つまり文部省に対する一種の“捨て台詞”だったのである。

このように、漱石は研究者としての栄達が約束された文部省による第1回給費留学生として、英国へ渡ることを心の底から喜ぶこともなく、同年(1900年)9月8日午前8時、五高教授時代の教え子で当時、東京帝大の院

生だった寺田寅彦らに見送られながら、ドイツ・ロイド社の客船「プロイセン号」で横浜港を出航する。

その船には、帰国後、日本におけるドイツ文学研究の草分けとなり、京都帝国大学教授に就任する藤代禎輔、さらに近代国文学と文献学の権威として東京帝国大学文科大学教授に就任する芳賀矢一が、いずれも文部省派遣のドイツ留学生として乗り合わせていた。

同船は上海、香港、シンガポール、パナン、アデンに寄港して、10月13日にスエズ運河を通過する。そして、同月17日の夕方にイタリアのナポリに入港し、漱石ら3人は翌18日に上陸して初めてヨーロッパの地を踏む。そして翌19日、漱石たち一行の船旅の終焉の地であるイタリアのジェノヴァに入港し、彼らは横浜を出航して41日目に当たる同日午後2時、荷物をまとめて下船する。

このジェノヴァは古くから海港都市として栄えたところで、漱石たちは夕食後、市中に繰り出したものの、この日は観光らしい観光をすることはなかった。馬車で街中を巡ったり、あちこちを散策したものの、現地の人々が東洋人である彼らを物珍しげに眺めたため、一行は「見物」されているという居心地の悪さを感じて早々にホテルに戻ったのである。

この地における初めてのヨーロッパ体験について、漱石は妻、鏡子に次のような手紙を出している。「以太利(イタリー)ノ小都会ナルニモ関セズ頗ル立派ニテ日本杯ノ比ニアラズ」「馬車ニテ見物致候が半分ハ見物サセニ歩行(ある)ク様[ナ]モノニ候」「皆々奇体ナ奴ダト云ハヌ許リニ見候」⁽³⁾。

元来、漱石は自意識過剰な性格で、このイタリアの港町において、日本人である自分が一体、どのような目で見られているのか、かなり神経質になっていたことが窺われる。そのような緊張感によって、早くも一種の神経症的な症状が現れ始めていたのかもしれない。それに加えて、不本意な「英語」研究のために渡欧しているという鬱屈とそれによる心理的呪縛が、彼のヨーロッパに対する意識をいささか対抗的、あるいは反抗的にしていたことも否定できない。

そのことが妻への手紙で浮き彫りにされているわけで、それは地元住民が自分たちを「奇体な奴だと言わぬばかりの目で見ている」と憤慨している点に凝縮されている。後に指摘される漱石の西洋コンプレックスは、その多くがロンドンと関連させて論じられることが多いが、実はこのイタリアの港町ジェノヴァにおいて、早くもその萌芽が見られるのである。

また、ジェノヴァ上陸からパリ到着までの過程において、彼らの頭を悩ませたことの1つが外国語能力の不足である。日本において3人が習得した外国語は、それぞれの留学先の言語である英語(英国)とドイツ語(ドイツ)だったが、この道程においてはイタリア語やフランス語の会話能力が必要とされた。

さらに、3人には案内人や添乗員が同行しているわけではなく、鉄道から馬車、ホテルなど難渋な手続きすべてを彼ら自身の手で行わねばならなかった。概して、研究者たる者は世間知らずで、これらの煩雑な手続きを要領よくやってのける才に欠けていたことは想像に難くない。

3人とも日本では社会的評価を受ける存在だっただけに、西洋の地における無様な右往左往はストレスが溜まるものであり、とりわけ漱石が「西洋人に“愚かな異邦人”と見られているのではないか」といった被害妄想的な疑心暗鬼に陥っていたことは容易に想像できる。そのような心理的葛藤と劣等意識が、妻への手紙で「言語ノ通ゼヌ容子ノ分ラヌ所程不便ナモノハ無之」「⁽⁴⁾歐洲上陸以來自動的ニ何モナシタルコトナク悉皆他動的ニ候」という投げやりめいた言葉になっている。

つまり、西洋社会では勝手がよく分からないため、あらゆることに能動的、主体的に行動できないという苛立たしきの吐露である。そのことが余程情けなかったのか、漱石は「悪者ガ田舎モノヲ瞞スノモ最ト存候」と自虐的になっている。⁽⁴⁾それは、現地人に「田舎者と誇られ、欺されても致し方がない」という強烈な卑下であって、日本での漱石には凡そ想像できない態度と言うしかない。実際、イタリアにおいてこのようなコンプレックスが蠢いていたとすれば、漱石の誇り高き精神を崩壊させた「ロンドンの

憂鬱」は容易に理解できるのである。

漱石一行はジェノヴァからパリに向かう国際列車内において、フランス語が巧く喋れないために車掌や他の乗客との意思疎通に困難が生じ、指定座席を巡るトラブルに巻き込まれている。ただ、漱石にとっては常に3人で行動していたことが唯一の救いで、このような数々の紆余曲折を経て、彼らは終着駅のパリに辿り付くのである。

3. 「フランス語を勉強しておけばよかった」と後悔する漱石

時計の針を少し戻して、イタリアに上陸した一行がその首都であるローマに向かわず、パリに直行した経緯に触れておく。漱石ら3人は既述の通り、漱石が英国、藤代と芳賀がドイツと留学先は分かっていたが、ジェノヴァ上陸から最終目的地までのルート選定は彼らの自由裁量に委ねられていた。

長い船旅の間に親交を深めていた3人は、上陸後もしばらく行動を共にすることにしていたが、ジェノヴァ以降については、ローマに向かってローマ帝国の古代遺跡やルネッサンスの芸術文化を鑑賞するか、それとも芸術文化の都であるパリを訪れるかの2案に絞られていた。そして、議論に議論を重ねた結果、最終的に「パリ行き」を決定するのだが、その決め手になったのが当時、パリで開催されていた万国博覧会だった。つまり、彼らはそれぞれの留学先に向かう前に、パリ万博の会場でヨーロッパを代表する文化や芸術、学術、科学技術を自身の目で確かめておくことを優先させたのである。

結局、ジェノヴァには1泊しただけで、漱石たちは翌10月20日午前8時半発の列車で出発する。途中、トリノ駅で下車して「パリ行き」に乗り換えるが、その待ち時間を利用して3人は駅舎前のホテルで昼食を取っている。そして午後4時半、同駅発の国際列車に乗車して、万博観光客で賑わっている「花の都」に向けて出発する。

ところが、この満員の列車内において前述の予期せぬトラブルが生じる。彼らが買い求めた指定座席に、すでに他の乗客が座っていたのである。この乗客たちと片言のフランス語で話し合っても埒が明かず、途中で車掌を呼んで事の解決に当たるが、結局、座れないという後味の悪い結果となる。

このようなトラブルが生じたせいもあってか、漱石はパリへの道中について妻宛ての手紙で次のように述べている。「汽車杯ノ雑踏混雑馴レヌ我々ハ『マゴマゴ』シテ途方ニ呉レル許リナリ」⁽³⁾。また、トラブル解決の最大の障害だったフランス語能力不足について、「此位ナラ謡ヲヤラズニ仏語ヲ勉強スレバ善カツト今更不覚ヲ後悔致候」と愚痴⁽⁴⁾っている。

つまり、日本では師匠^{うたい}について謡を習ったことがあったが、ヨーロッパにやって来てみると、そのような暇があったら多少でもフランス語を勉強しておくべきだったという後悔である。実際、漱石は五高教授時代に加賀宝生流の謡を習っていたが、生来、酷い音痴だったということもあって、大方の評判は「聴くに堪えない代物だった」とされている。

しかし、漱石の「謡とフランス語」についての言及は、謡に取り組む姿勢が真剣なものでなかっただけに、そのような比喩はフランス語に対する冒瀆ではないかという批判を招来する。漱石門下生である安倍能成は、このことを念頭に起きながら、漱石の謡の稽古ぶりを次のように述べている。

「先生は謡を一つの遊び若しくは養生の一つと考へて居られたらしく、稽古は割に熱心であったが、強ひて上達を期するといふやうな緊張はなかつた」⁽⁵⁾。一方、本人も後にパリに旅行する高浜虚子は、この「謡なんか稽古せず⁽⁵⁾に仏蘭西語でも習って…」という漱石の口吻に憤りを隠さず、漱石を厳しく批判している。

いずれにせよ、3人が乗った国際列車は昼夜、フランスに向けてひた走り、翌21日午前8時、終着駅であるパリに到着する。このパリ駅は、イタリアなど東方の諸国、さらにマルセイユやリヨンなど南フランスからの列車が到着するパリ第12区の「リヨン駅」のことである。

この駅は明治や大正時代、神戸を出航した外国航路の客船がアジア各港、

そしてインド洋を經由してマルセイユ港に着き、そこで一路パリを目指す列車に乗り換えた日本人たちが辿り着いた駅である。永井荷風や上田敏などは米国經由、また与謝野晶子や林芙美子たちは旅費が廉価だったシベリア鉄道經由だったが、この海路と鉄路を併用したコースは当時、もっともスタンダードなものだった。その終着駅がリヨン駅だったわけで、その意味においてこの駅は多くの日本人にとっての「パリの玄関口」、いわば上野駅のような存在だった。

漱石一行が到着した時、この駅は建築家、マリウス・トゥドワールの設計による新駅舎が建造中だった。この工事中ということに加えて、ヨーロッパ各地から膨大な数の万博観光客が殺到していたこともあって、駅舎の内外は想像を絶する雑踏と喧騒に包まれていた。

ともかく、「意外ノ失策ナク『パリス』迄参候が不思議ニ候」と安堵した漱石だが、併せて「八時頃漸ク『パリス』ニ着ス停車場ヲ出デ、見レバ丸デ西モ東モ分ラズ恐縮ノ体ナリ」とジェノヴァとは比較にならない大都會を目の当たりにして、茫然自失になっている様が窺える。

漱石の日記や手紙類などを精査しても、彼らの到着時、誰か日本人がこの駅に出迎えに来てくれる予定になっていたとの記述は見当たらない。そうであるならば、当然、彼らは自力で交通手段を確保するしかないわけだが、既述の通り、3人ともフランス語会話は堪能でないという大きなハンディを抱えていた。

ところが、このような苦境において思わぬ力を発揮したのが、船中で暇に任せてフランス語を独習していた藤代だった。その様を漱石は「巡查如キ者ヲ捕ヘテ藤代氏船中ニテ一夜造リニ強(勉)強シタル仏語ニテ何か云フニ親切ナル人ニテ馬車ヲ雇ヒ呉レテ正木氏ノ宿所迄送り届シ(ケ)呉タリ」と記している⁽⁶⁾。つまり、藤代が駅舎の外にいた警官に拙いフランス語で話しかけたところ、幸運なことにその警官が親切な人だったため、藤代が示した訪問先の住所を確認した後、近くの馬車を手配して、3人をそこまで送り届けるよう差配してくれたのである。

漱石たちは、その馬車で最初に訪問することにして文部省の美術担当高官だった正木直彦(帰国後、東京美術学校長に就任)の宿泊先に向かうが、折悪しく正木は英国出張中で留守だった。このため正木と同様、万博関係の仕事でパリに駐在していた文部省書記官、渡辺董之助が、漱石たちの宿泊先の手配などを世話してくれることになる。

昼食後、漱石たちは夜行列車の旅の疲れを癒した後、再びリヨン駅に赴いて駅止め預かりにしていた荷物を受け取っている。そして、ホテルにチェックインした後、多分、渡辺の案内によるものと思われるが、パリの街中に繰り出し、高級レストランで本格的な晩餐をとっている。漱石はこの店で妙齢の美人と英語で話す機会があったようで、これが余程、嬉しかったのか、ホテルに戻ってこのことを次のように日記に書き留めている。「晩餐ヲ料[理]店ニ食ニ行ク」「美人アリテ英語ヲ話ス」⁽⁶⁾。

当時のパリは世界屈指の「芸術の都」だったが、それと併せて世界の先端を行く近代都市でもあった。世界で最も高いエッフェル塔に加え、調和のとれた高層石造建築群、さらに凱旋門から幾何学的に美しく伸びた大通り、深夜でも煌々と光を放つ繁華街、そして市内の地中を轟音とともに疾走する地下鉄の存在がそれを象徴していた。

漱石にとって、これらはいずれも驚愕すべきものだったようで、その印象を次のように形容している。「『パリ』ニ来テ見レバ其繁華ナルコト是亦到底筆紙ノ及ブ所ニ無之」^{なかなずく}「就中道路家屋等ノ宏大ナルコト馬車電気鉄道地下鉄道等ノ網ノ如クナル有様寔ニ世界ノ大都ニ御座候」^{まこと}⁽⁷⁾。

初めて目にする西洋都市の絢爛豪華な姿に圧倒され、多分に我を失って「世界の大都に御座候」と礼讃したのである。元来、漱石は自身が関心を抱いている芸術や美術、学術の点において、パリという街を高く評価していた。ところが、到着当日に受けたインパクトは、最新の科学技術を駆使した鉄道や地下鉄などの交通手段、そして贅の限りを尽くした華やかな繁華街など、近代都市のインフラから受けたものが多くを占めていたのである。

4. パリの繁華街は「銀座を50倍ぐらい立派にしたもの」と大感激

当時のパリは万国博史上、最も華やかとされる1900年万博の真っ最中だったが、それは世界一の高さを誇る高層建造物、しかも地上から展望台までエレベーターで昇降するという最新の科学技術を備えたエッフェル塔の存在を抜きにしては語れない。つまり、パリは単なる「芸術の都」とどまらず、来たる新世紀において産業経済的發展を遂げる可能性を博覧会によって誇示していた。

つまり、パリはムーラン・ルージュやロートレック、ショパン、スタンダールといった名前に象徴される芸術文化の“魅惑的な女神”であると同時に、資本主義が興隆する新世紀の到来を前にして、産業化に向けて躍動し始めた「近代都市」だったのである。

このパリ万博は1900年4月15日から11月15日までの会期で開催されており、それまでの万博と比較して、内容の斬新さや規模、参加国数とも類例のないものだった。当然のことながら、一歩誤ると傾国に陥りかねない巨額を投入したこの一大イベントの目的が、近代国家としてのフランスの国力や技術力の誇示と国威昂揚、さらにベル・エポックに象徴される百花繚乱の芸術文化の発信だったことは間違いない。

実際、万博会場はエッフェル塔からアンバリッド周辺、そしてセーヌ両岸のパリ中心部に及ぶ広大なもので、そこに約100棟のフランス館、さらに75棟にも及ぶ日本館などの外国館やバビリオンが所狭しと建ち並び、7ヵ月間の期間中における総入場観客数は、当時としては史上最高の4810万人に達した。

この万博会場が如何に広大であったかは、漱石の次のような日記の記述を見れば明らかである。「午後二時ヨリ渡辺氏ノ案内ニテ博覧会ヲ観ル」「規模宏大ニテ二日ヤ三日ニテ容易ニ観尽セルモノニアラズ」「方角サヘ

分ヲヌ位ナリ」⁽⁶⁾（この渡辺氏は、パリ到着時から漱石一行の世話をしていた渡辺董之助のことである）。

高村光太郎が師と仰いだ彫刻家、ロダンにいたっては、会場の一角に個人のパビリオンを建立し、『地獄の門』など自作の作品を展示していた。もちろん、美術作品はフランスにとどまらず、世界中から名品が集められて陳列されていたというから、そこはいわば世界随一の国際美術館のようなものだったわけで、美術愛好家にとって万博見物はまさに垂涎的だった。

遙かユーラシア大陸の東端の島からやって来た漱石も、その例外ではなかった。彼はひと一倍美術に対して関心と造詣が深かっただけに、ここはまさに“パラダイス”そのもので、時間が許す限り、頻繁に会場を訪れ、嬉々として美術鑑賞をして回った。

漱石はこのパリに実質1週間しか滞在しなかったが、そのうち3日間を万博会場の訪問に充てている。しかし、この程度では到底満足できなかったのか、妻への手紙で「博覧会八十日や十五日見ニ[テ]モ大勢ヲ知ルガ積ノ山カト存候」と時間の少なさを嘆いている。⁽⁴⁾

また、この万博では西洋科学技術の粋を集めた様々な最新機器が登場しており、それは地下鉄などに代表される社会インフラに加えて、エッフェル塔を昇降するエレベーターやエスカレーター、さらに会場間の移動用に開発された全長3.6キロに及ぶ「歩く歩道」も敷設されていた。

これらの中で漱石の度肝を抜いたのが、聳え立つ高さ320メートルの鉄の尖塔、エッフェル塔の威容である。パリに到着した翌日、漱石は早速この塔に案内されて登っている。そして、それが余程感動的だったのか、「名高キ『エフエル』塔ノ上ニ登リテ四方ヲ見渡シ申候」「是ハ三百メートルノ高サニテ人間ヲ箱ニ入レテ鋼条ニ[テ]ツルシ上ゲツルシ下ス仕掛ニ候」と興奮気味に感想を書いている。⁽⁴⁾

この鉄製のエッフェル塔はパリの自然景観を破壊しているとして、小説家のスタンダールは激しく忌み嫌ったが、彼の文学に心酔していた永井荷

風はパリ滞在中、師に倣ってついにエッフェル塔に登ることはなかった。

エッフェル塔に登った帰りに、漱石は渡辺宅で夕食をご馳走になり、その後、マドレーヌ寺院からオペラ座、レピュブリック広場に通じるパリ唯一の目抜き通りを散策している。この大通りは、荷風がそのあまりの煌びやかさと賑やかさに心奪われ、絶賛した「グラン・ブールヴァール」のことである。

この大通りは今日と変わらず、当時も両側に高級レストランやカフェ、ビストロ、劇場などが軒を連ね、深夜から明け方まで酔客のご乱行やその筋の女性の嬌声、そして脂粉の香りがそこかしこに漂う栄華と遊興の天国だった。それでは、「謹厳実直」が服を着て歩いているとも形容された漱石の目に、この光景は一体、どのように映ったのだろうか。

妻への手紙によると、「午後十二時迄『パリス』ノグロン ヴルヴハート申ス繁華ナ処ヲ散歩シテ地下鉄道ニテ帰宅致候」とあることから、当夜は日付けが変わる頃まで当地で“パリの夜”を過ごし、その後、地下鉄に乗ってホテルに戻ったことが分かる。⁽⁴⁾そして、漱石は就寝前に日記を開き、先ほど見てきた光景を次のように記している。「Grand[s] Voulevard [Boulevards] ニ至リテ繁華ノ様ヲ目撃ス」「其状態ハ夏夜ノ銀座ノ景色ヲ五十倍位立派ニシタル者ナリ」。⁽⁶⁾

この大通りの賑わいについて、「銀座を50倍ぐらい立派にしたもの」と漱石らしくもない単純極まりない形容をしているが、要はそれほど度肝を抜く華やかさと艶やかさに圧倒されたということだろう。荷風や光太郎はこのような現地の雰囲気自然に溶け込み、まるでフランス人のような顔をして享樂の限りを尽くしているが、「50倍立派なり」と表現した漱石の場合、一介の観光客として距離を置いて眺めていたに違いない。

つまり、このような眩しい存在としての「西洋」との間に大きな心理的距離があったわけで、これについて江藤淳は「彼はパリの色彩と栄華に圧倒された一個の田舎者であることを自認せざるを得ず、少からず自尊心を傷つけられていた」と当時の漱石の心の内を推し測っている。⁽⁸⁾

当夜、漱石は地下鉄に乗ってホテルに戻っているが、このパリの地下鉄は万国博に合わせて市内を東西に横断する1号線が開通したばかりだった。深夜、しかも明かりを灯した列車が人間を乗せて地中を疾走するという光景は、江藤が指摘する「田舎者」としての漱石、さらに文学者でもある漱石にとって、一種の恐怖イメージや想像力を惹起する結果となったようだ。

漱石は鉄道や地下鉄を近代都市に不可欠なエネルギーの象徴と考えていたが、その後のロンドンにおける地下鉄体験とも相俟って、この種の心理的恐怖心は彼の心の奥深くに刻印された。それは帰国後に発表した小説『倫敦塔』の中で、列車が家に飛び込んで来ないかと恐れる妄想を描写していることでも明白である。漱石は高速移動する近代文明の権化としての「鉄の箱」と、それに乗せられて成す術のない無力な「人間」を対峙させることによって、文明の利器に対する人間の恐怖心を文学的に表象しようとしたのである。

1862年(文久2)、幕府派遣の遣欧使節団随員としてパリを訪れた福沢諭吉は、近代国家の建設という観点から鉄道や病院の重要性を痛感し、帰国後、その実現に尽力する。しかし、この鉄道や地下鉄に対する漱石の反応は、そのような社会的インフラとしての関心より、人間と機械と文明という文学的視点によって喚起されていた点に特徴がある。

このように、先進的な西洋における漱石について、石井洋二郎は「輝かしく沸き立つような環境にいきなり身を置いた一介の東洋人である金之助、熊本の田舎から上京したばかりの三四郎よろしく、にわかには埋めがたい『文化的落差』を肌で感じずにはいられなかったはずだ」と分析している⁽⁹⁾。実際、鉄道に対する心理的恐怖心に象徴されるように、漱石の「近代化」に起因する心理的圧迫感は想像を絶するものがあったと思われる。そして、それは「西洋」に対するコンプレックスの肥大化、さらには神経症の顕在化として連鎖反応を起こして行くのである。

漱石一行に話を戻すと、彼らはこの華やかなグラン・ブールヴァールを散策した翌23日の夜、さらにディープなパリの裏町へと足を踏み入れてい

る。当然のことながら、誰かの案内で訪れたのだらうが、漱石は妖しげなミュージックハウスやアンダーグラウンドホールなどを梯子している。そして、この夜の体験について、漱石は「午前三時帰宅ス」「巴理ノ繁華ト墮落ハ驚クベキモノナリ」と見てはならぬものを見てきたような感想を述べている。⁽⁶⁾

5. パリ万博で西洋美術の真髄に触れ、それを小説に反映

漱石の美術に対する造詣の深さは広く知られていたが、筆者が調べた限りでは、パリ滞在中に漱石が「美術の殿堂」であるルーブル美術館に足を運んだという記録は見当たらない。もし、それが事実だとすれば、漱石は万博会場で十二分に美術鑑賞をしていたからに違いない。

記録によると、漱石は10月25、27日の両日、万博会場の美術展示館「グランパレ」を訪れ、そこで数々の名画や彫刻を熱心に鑑賞している。25日に続いて26日も一旦会場に向かったが、途中で激しい降雨に遭い、急遽、コンコルド広場近くのレストランに立ち寄っている。雨宿りを兼ねてここで昼食を取ったが、一向に雨が止まなかったためホテルに引き返している。

このように、パリ滞在中の漱石にとって万博訪問は西洋の知識を得る絶好の場であり、それが滞在の主たる目的でもあったが、その万博に漱石がもっとも関心を抱き、のめり込んでいたのが美術鑑賞だった。当時、美術展示館「グランパレ」の2階では「フランス19世紀美術100年回顧展」が開催されており、クールベやミレー、コロー、さらにモネやルノワール、セザンヌといった印象派を代表する数々の名画が展示されていた。漱石は、それまで書物や雑誌に掲載された写真でしか見たことのなかったこれらの作品の本物を、しかも至近距離でじっくりと鑑賞できたわけで、その感動と喜びは計り知れないものがあつた。

このパリ万博と日本との関わりについては、江戸幕府が浮世絵や陶器、漆器、甲冑などを出展した1867年(慶応3)開催のパリ万博にまで遡る。そ

の時は、繊細で洗練された筆致の歌麿や広重、北斎などの浮世絵が一躍、注目的になり、それを契機に「ジャポニスム旋風」がフランス画壇を席捲して、ゴッホなど印象派に大きな影響を与えることになった。

一方、漱石が訪れた1900年万博では、法隆寺の金堂を模した威風堂々とした日本館が建造され、そこに日本人画家たちの作品も多数出展されていた。漱石は西洋を代表する幾多の名画を鑑賞して回ったが、それと相前後して日本館にも足を運び、日本人画家たちの作品も鑑賞している。しかし、それらに対する評価は「日本ノハ尤モマヅシ」という極めて辛辣なものだった。⁽¹⁰⁾ 歴史の浅い日本洋画が稚拙に見えたのは致し方がないが、その一方で黒田清輝の『湖畔』や藤島武二の『池畔納涼』については高く評価して賛辞を送っている。

実は当時、この万博には日本を代表する黒田清輝や浅井忠、小山正太郎、そして正木直彦といった美術界を背負う大立者たちが顔を揃えていた。そこへ大の美術愛好家で、その確かな審美眼で知られる漱石が訪れたわけで、新関公子も指摘しているように、当地において漱石は彼らと親交を深め、その後、それが漱石文学の財産にもなる華麗な美術人脈を築く絶好の機会になったのである。⁽¹¹⁾

それと同時に、黒田や浅井たちが揃ってパリにやって来ていたことは、日本美術界がこの万博を如何に重視していたかを如実に物語っている。ここに登場する正木直彦は、漱石一行がパリに到着した時、まず最初に訪問したものの、英国出張中で会えなかった人物である。正木は前年の1899年(明治32)末、文部省美術課長として渡仏し、パリ万博出展の準備作業に携わっていた。そして帰国後、東京美術学校(現東京芸大)の校長に就任している。

また、浅井忠は当時、東京美術学校の教授で、この年(1900年)の2月、万博担当の臨時博覧会監査官に任命されてパリに赴任していた。パリ到着時、漱石一行は正木に会えなかったが、翌22日、この浅井忠を訪ねている。当日、彼もまた留守で会えなかったが、4日後の26日朝、再度訪問して面

会が叶っている。浅井は高浜虚子が主宰する俳句雑誌「ホトトギス」の表紙を描いていた関係で、漱石と面識があり、帰国後は漱石の出世作となった『吾輩は猫である』の中編と下編の挿絵を描いている。

いずれにせよ、この万博において漱石は数ある西洋名画を次から次へと鑑賞して回り、審美眼を養うことに勤しんだ。その結果、先にも述べたように日本人西洋画家の力量不足を痛烈に指摘したわけだが、その一方で「博覧会ヲ覽ル日本ノ陶器西陣織尤も異彩ヲ放ツ」と日本古来の陶器や織物の美術的価値を高く評価している⁽¹⁰⁾。

これは取りも直さず、当時の日本美術界に横溢していた西洋美術に対する過度の傾倒への嫌悪の裏返しで、その風潮と一線を画し、日本固有の歴史に裏打ちされた伝統美を礼讃したものである。そのことはまた、数々の素晴らしい西洋美術の圧倒的迫力に打ちのめされた漱石が、知らず知らずのうちに「西洋」に対するコンプレックスと同時に、それに対する抵抗、つまり日本的なるものの再評価という感情が醸成されて行った証左であるのかもしれない。

このように漱石の美術に対する関心と見識の深さは、当時の日本文壇では森鷗外を除けば、彼に比肩できる者はいなかったと思われる。そして、これらの美術的素養が漱石の作品に一種の彩りや芳香、隠し味、そして巧みなプロットとして取り入れられ、小説全体の雰囲気をも美的に醸し出す絶妙の装飾効果を上げている。それは『吾輩は猫である』や『倫敦塔』『坊ちゃん』『草枕』『文学論』も例外ではなく、このような美術に対する深い識見が「漱石世界」を形作っているといっても過言ではない。

実際、このような小説技法について、漱石自身「風景描写や雰囲気づくりには極力、美術の力を借りた」と告白している。これに関して、新関公子は初期の漱石作品において「画家の名前や美術品の名称を文中にちりばめ、教養の香りを漂わすか、装飾的効果を高めるために絵画を利用した例が多い」と分析している。しかし、『虞美人草』以降の作品においては、作品の主題や時代背景、さらには主人公の心理を象徴する役割を担ってい

るものの、次第に間接的あるいは揶揄されるような用い方になったと指摘し、「これらの名詞は単なるペダントリーに過ぎず、その名詞でなければならぬ必然性を感じさせない」と考察している⁽¹²⁾。

6. 「芸術の都」から煙と煤に覆われた 「醜悪な産業都市」ロンドンへ

漱石はパリに到着した10月21日からロンドンに向けて出発する28日までの足掛け8日間、万博開催で賑わいを見せるこの街で“嬉々とした”毎日を過ごしている。それは多分に、彼の心に重くのしかかっていた「英語研究」がこの地においては念頭になかったこと、そして何よりも熱い想いを抱いていた芸術文化が身の周りに満ち満ちていたこととも無縁ではない。つまり、「芸術の都」の洗練された風と香り、そして魅惑的な“甘い蜜”を存分に吸収して、いわば夢見心地だったわけで、その意味において漱石は明らかに“躁”の状態にあった。

もちろん、この街が単なる通過点に過ぎないという気楽さがあったのも事実である。その一方で、実際に滞在することによって、パリは世界中の何処よりも美術や芸術、学術を尊重する「特別の街」であることを、漱石が実感したことは間違いない。その意味において、漱石も荷風並にパリを「理想郷」と考えていたとしても不思議ではない。

そして、漱石は後ろ髪を引かれるように1900年(明治33)10月28日の朝、パリを出発して留学先のロンドンに向かう。しかし、フランス西海岸から英国東岸に渡る船は折からの強風に煽られ、ドーヴァー海峡では時に立ち往生するほど大揺れし、生来、胃弱の漱石は酷い船酔いに苦しめられ、散々な目に遭う。

この渡航の際の難渋は、何事にも神経過敏で夢想家でもある漱石にとって、上陸後から始まるその後の2年間の艱難辛苦を予感させるものだったのかもしれない。ともかく、その日の午後7時過ぎ、ロンドンのヴィクト

リア駅に無事到着する。そして翌29日、商工業の視察でヨーロッパに派遣され、当時、ロンドンに滞在していた美濃部俊吉(帰国後、農商務省秘書官に就任)の案内で、漱石は市内を見学して回っている。

そこで漱石が目目の当たりにしたのは、風雅なパリとは打って変わって、工業製品を大量に生産して経済的繁栄に邁進する「巨大産業都市」の姿であった。街中では煙突から吐き出された煤煙が建物ばかりか、人々の鼻や喉、そして肺の奥まで黒く染めており、この光景を漱石は次のように記している。

「倫敦(敦)ノ町ヲ散歩シテ試ミニ啖(痰)ヲ吐キテ見ヨ真黒ナル塊リノ出ルニ驚ケベシ」「何百万ノ市民ハ此煤烟ト此塵埃ヲ吸収シテ毎日彼等ノ肺臟ヲ染メツ、アルナリ」「我ナガラ鼻ヲカミ啖ヲスルトキハ氣ノヒケル程氣味悪キナリ」⁽¹³⁾」。

これはロンドン在住2ヵ月余、1901年(明治34)1月4日付の日記からの抜粋だが、漱石は清潔で文化的な生活よりも、「富国」という目的のためには深刻な大気汚染も厭わない産業国家の“醜い素顔”を痛烈に非難しているのである。

実際、当時の英国は7つの海を支配する「大英帝国」であり、ロンドンはその根幹で支える司令塔であると同時にエンジン部分でもあった。それ故、この街における社会的価値観はパリとは根本的に異なり、生活の糧ではない芸術や文化が人々の憧憬の対象ではなかったのである。

当時の日本も同様の「富国強兵」という国家目標を掲げ、英国から様々な科学技術や武器、さらに国家行政システムを導入して、近代化を強力に推進していた。その本家本元において、その“醜い素顔”を自身の目で観察した漱石が、このような人間性に重きを置かない国家優先の政策に諸手を挙げて賛成するはずはない。

そして、いつしか祖国を変貌させてしまう手本としての英国、あるいはロンドンに対して徐々に嫌悪感を募らせるようになる。これについて、山崎正和は「漱石は、近代化には大いに賛成し、個人主義も標榜していたけ

れども、工業化社会の成果主義には非常な嫌悪感を持っていたと思うんです。それはおそらく、ロンドン留学時代にイギリスの工業社会に対して持っていた感覚的な嫌悪感と結びついているんでしょう」と述べている⁽¹⁴⁾。

つまり、漱石は産業興隆の代償としての大気汚染を痛烈に批判しながら、その一方でこの産業先進国に対して劣等意識を抱いていた。それは『文学論』の序文における次のような記述から窺える。「余が乞食^{うかが}の如き有様にエストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を漲らしつつあるこの大都会の空気の何千立方尺かを二年間に吐吞^{とどん}したるは、英国紳士のために大に気の毒なる心地なり」⁽¹⁵⁾。

このウェストミンスターは国会議事堂のある区域のことで、いわば英国の権力の中枢を象徴する境界である。漱石はロンドンの劣悪極まりない都市環境を「煤烟の雲」という表現で非難しているが、それと関連させながら、そこを散策する自身の姿を「乞食」あるいは「英国紳士に申し訳ない」と卑下しているのである。

これについて、江藤淳は「一九〇〇年秋のロンドン、世紀末のパリとはかなり異質な都会であった。つまりそれは、当時世界でもっとも発達した近代産業都市——トレヴェリアンの言葉を借りれば、『生活の眼に見える部分に関するかぎり、美やよろこびを求めても無駄』だというような、煙と煤におおわれた巨大な都市にほかならなかった」と述べている⁽¹⁶⁾。つまり、ロンドンの人々の生活を彩る芸術文化とは縁遠い無味乾燥な産業都市だったが、漱石はそこに秘められた近代的なパワーを認めざるを得なかったのである。

それに対して、高橋昭男は漱石の英国(ロンドン)批判を資本主義や環境問題と絡めて積極的に評価している。「(夏目)金之助は産業革命の後、人間が機械によって支配されていく資本主義社会の行方を早くも察知していたとみることができる。加えて、大気汚染によって地球環境が蝕まれ始めたことをも予測していた」⁽¹⁷⁾。つまり、その後の資本主義の発展過程を俯瞰すれば、工業化の進展に伴って人間の健康を蝕む公害問題がクローズア

ップされることになるが、漱石は当時、既にそのような事態の出現を直感的に予知していたとする分析である。

漱石は、文部省が留学目的として指示した「英語研究」より「英文学研究」を優先させたかったことは既に述べたが、それでは漱石と英文学の関係は如何なるものであったのか。

明治の日本において、英文学はロシア文学やフランス文学と比べてマイナーな存在だったが、渡欧前の漱石は英国の著名な小説家、ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディの生活と意見』や女流作家、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』を愛読しており、両作家から深甚なる影響を受けていた。とりわけ、後者のオースティンに対する敬愛心は信念に近いものがあり、その影響を受けて終生「則天去私」を人生訓とした。

文部省はこのような漱石の英文学に対する強い関心を見無視する形で、国策の一環として「英語研究」を指示し、その研究成果の報告をロンドンの留学先にまで頻繁に求めている。しかし、頑としてわが道を行く漱石がそれに唯々諾々と従うはずもなく、「英語学」どこ吹く風で、彼は現地の書店で興味のある書物を買って求めては、専ら下宿に閉じ籠ってそれらを読み漁る日々を送るのである。

このような異国における孤独で疎外された生活環境が、生来、プライドが高く内向的だった漱石の心模様をいっそう陰鬱なものに染めて行くのは、自然の成り行きと言うしかない。そして、たまに外出すると、東洋人である自身に対するコンプレックスを強く意識するという悪循環に陥るのである。

皮肉なことに、彼自身が西洋の「高慢と偏見」(オースティン)の荒波に翻弄されてしまったわけである。それは永井荷風がまるで蝶でも舞うが如く、あっけらかんとしてパリの街を遊泳闊歩したのとは、あまりにも対照的な“煉獄の日々”だった。しかし、このような筆舌に尽くし難い苦悶の体験があったからこそ、漱石文学は人間の心の髣髴や機微を汲み取る感性に恵ま

れたと言えるのかもしれない。

7. 「西洋」に対する精神的萎縮が人種的身体的 コンプレックスに

このように外界と隔絶された漱石の生活は、いわば英国における一種の幽閉のようなもので、その結果、彼の西洋に対する劣等意識は妄想への傾斜を強めながら、次第に肥大化して行くことになる。それでは、彼の西洋に対するコンプレックスの中身は一体、如何なるものであったのか。

漱石は東京帝大の講師を嘱望されるほどの英語通であり、併せて優れた英文学研究者でもあった。それ故、当時の日本において彼は屈指の英国通、つまり西洋通であったが、実際に英国にやって来て、そこで生活してみると、これまでの研究者としての誇りや自信、さらに矜持までもが音を立てて崩れ去る観に囚われる。

具体的には、現地の人々の会話がよく聴き取れない、理解できないといった英語の会話力に関する事、ライフスタイルの相違、さらに東洋人に対する英国人の蔑視や日本国家に対する無関心が挙げられる。それに加えて特筆すべきは、漱石が潜在意識の中で感じていたに違いない自身の「低身長」に対する劣等感である。いわゆる、異国における身体的劣等感の顕在化で、これはさらに肌の色の相違など、西洋人との比較を通して拡大して行く。

そして、これらの鬱屈した感情が漱石の心の中で連鎖反応を起こし、いつの間にか“惨めな日本人”という自虐的なイメージを形成して行ったのである。それが如何に深刻なものであったかは、漱石の次のような告白から明らかである。「向へ出て見ると逢ふ奴も〜皆んな厭に脊いが高い。御負おまけに愛嬌のない顔ばかりだ」「向ふから人間並外れた低い奴しめが来た。占たと思つてすれ違つて見ると自分より寸二許り高い。此度は向ふから妙な顔色をした一寸法師こんどが来たなと思ふと是即ち及公だいこう自身の影が姿見に写つた

(18)
のである」。

これは漱石が病床の正岡子規に宛てロンドンから送った手紙であるが、子規はこの手紙の文章に「倫敦消息」という題名を付けて「ホトトギス」（明治34年5月号）に掲載した。ここで漱石は自身のことを「一寸法師」と表現しているが、彼の実身長は約160センチだった。確かに、英国においては低身長の種類に属するかもしれないが、「一寸法師」と形容するほどの低さではない。

その胸中を察するに、英国人と対等に伍して行きたかった漱石は、少しでも“劣る”部分に神経過敏になるあまり、その反動としてこのような過剰な自虐的表現になったのではないだろうか。つまり、「西洋」に対する絶えざる緊張と精神的萎縮が、知らず知らずのうちに心理面において自身の身体的な矮小化を促したのである。

この「低身長」というコンプレックスに加えて、漱石が度々言及しているのが「白人対黄色人」という人種的相違で、その点に関しては黄色人種である自身の白人に対する劣等性を正直に吐露している。それは妻への手紙で「日本に居る内はかく迄黄色とは思はざりしが当地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつかし申候」「其上背が低く見られた物には無之非常に肩身が狭く候」と述べ、さらに日記に「我々ノ黄ナルハ当地ニ来テ始メテ成程ト合点スルナリ」と記していることから明らかである⁽¹³⁾。

つまり、英国にやって来て自身の低身長と肌の黄色さを痛感させられ、それを身体的な観点からの「美的劣等」と認識したのである。しかし、このような身長差や肌の色、さらに英会話能力の不足などは、英国通の漱石が留学前に知っていなかったはずはない。それだけに、このように劣等感に悶え苦しむ姿は碩学で知られる漱石らしくないが、要はそれだけ精神的に追い込まれていた証左でもある。

そして、このような劣等感に起因する自虐もここに極まれりというのが、漱石日記における「我々はポットデの田舎者のアンボンタンの山家猿のチンクリンの土気色の不可思議ナ人間デアルカラ西洋人から馬鹿にされる

は尤だ」という驚くべき記述である。⁽¹⁹⁾

ここに登場する「アンポンタン」や「山猿」「チンチクリン」といった自己卑下の表現は、高潔で冷静で識見のある英文学者、漱石の言葉とは到底信じられないほど酷いものである。しかも、こんな自分は「馬鹿にされるのも尤だ」と自虐的に締め括っており、これは当時、既に漱石が精神的自爆状態に陥っていたと考えても不思議ではない。

このような漱石の身体的コンプレックスは、実はパリ滞在中にその片鱗が表面化していた。しかし、当地では留学生仲間と一緒に行動していたことや、楽しい万国博覧会の見学に忙殺されていたこともあって、それがロンドンほど深刻になることはなかった。

「当地ニ来て観レバ男女共色白ク服装モ立派ニテ日本人ハ成程黄色ニ観エ候」「水杯ハクグラス下女ノ如キ者デモ中々別嬪有之候」。これはパリから妻に宛てた手紙の一部だが、その内容はこれまであまり自覚していなかったが、パリにやって来て初めて自分たちが黄色人種であることを痛感させられた、さらに当地ではあまり身分の高くない女性であっても「別嬪」に見えると、“白人美”を讃えているのである。⁽⁴⁾

さらに、この手紙では低身長と黄色人種に加えて、漱石の顔の「あばた」が登場している。「小生ノ如キアバタ面ハ一人モ無之候」がそれである。⁽⁴⁾ 漱石は3歳の時、種痘から疱瘡に罹患し、その痘痕が顔面に「あばた」として残った。自意識や美意識がひと一倍強い漱石は、以来、それを“醜いもの”として異常なほど気にしていたのである。

これについて、愛弟子の芥川龍之介が次のような興味深い回想記を残している。「ある人が先生に、『先生のやうな人でも女に惚れるやうなことがありますか』ときくと、先生はしばらく無言でその人をにらめつけてみたが『あばただと思つて馬鹿にするな』と言つたといふことを極く最近ある友達からきゝました。⁽²⁰⁾」

つまり、漱石は自身が“弱点”と認識していることが、他人にどのよう
に思われているのか、常に気になっていたわけで、それは西洋において一

層、過敏になっていたと思われる。それだけに、この顔の「あばた」はパリだけではなく、ロンドンにおいても現地人の反応を密かに観察していたことは疑うべくもない。

このような漱石の劣等意識について、石井洋二郎は「典型的な西洋コンプレクスとしてこれらの反応を片付けてしまえばそれだけの話だが、ここに見られるのが単なる個別的な劣等感の集積というよりも、むしろ身体性のレベルで相互に強く結びついた一連の根源的な違和感であり、やや大袈裟な言い方をすれば金之助の意識にその後執拗につきまとうことになる存在論的不安の兆候であることを見逃してはなるまい⁽²¹⁾」と分析している。つまり、西洋における漱石の深刻なコンプレクスは、個々の身体的劣等感だけではなく、それらの背景にある根源的な違和感や存在論的不安を斟酌することなしには語れないと言うのである。

8. 「不愉快の極みだった」ロンドンで神経衰弱が 悪化して「夏目 発狂せり」

このように漱石の英国滞在は終始、孤独感と疎外感、そして劣等感に苛まれ、著しく神経を衰弱させる“悪夢”そのものであった。そのような不安定な精神状態で「西洋」や「英国」「英国人」を客観的に批評できるはずはなく、漱石が日記や書簡、メモ帳などに残した、それらに対する記述の多くは感情的なものだった。

とりわけ、「英国」に対しては嫌悪感を隠そうともせず、「ロンドンは無風流な事物や人間ばかり、文明がこのようなものであるなら野蛮の方がかえって面白い」といった内容の手紙を妻に送っている。そして、このような嫌英感情は帰国してからも消え去ることはなく、帰国2年から3年後に書かれたとされる備忘録では、次のように「英国人」を激しく糾弾している。「天下に英国人程高慢なる国民なし」「英人はスレカラシの極、巾着切り流に他国人を軽蔑して自ら一番利口だと信じて居るなり⁽²²⁾」。

明治の世において、文部省から派遣されたエリート官費留学生で、しかも帰国後に東京帝大で教鞭を執っていた人物が、自身の留学先をこれほど辛辣な言葉で誹謗中傷するのは異例という他ない。

また、1906年(明治39)11月に刊行された『文学論』の序文においても、「官命なるが故に行きたる者は、自己の意思を以て行きたるにあらず。自己の意志を以てすれば、余は生涯英国の地に一步も吾足を踏み入る事なかるべし」⁽²³⁾、さらに「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群^{ろうぐん}に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり」と、積極的に望んだわけではない英国留学、当地における不愉快で惨め極まりない生活、それ故に二度と英国を訪れることはない⁽¹⁵⁾と口を極めて罵っている。

そして、このような嫌英感情がいつしか「西洋」全体に対する生理的嫌悪感に発展して行くわけで、次の日記の記述はそれを如実に物語っている。「西洋人ハ執濃イコトガスキダ華麗ナコトガスキダ 芝居ヲ観テモ分ル食物ヲ見テモ分ル建築及粧鞋ヲ見ニ(テ)モ分ル夫婦間ノ接吻や抱キ合フノヲ見テモ分ル」「是ガ皆文学ニ返照シテ居ル故ニ洒落超脱ノ趣ニ乏シイ」。つまり、夫婦の抱擁まで引き合いに出して、これらの“濃厚”な西洋的所作ゆえ、彼らは日本人のような繊細な洒落超脱の趣に欠けると切って捨てているのである。⁽²⁴⁾

そのよう漱石であるが故に、日本政府の主体性のない「西洋」追隨に我慢がならなかったのは当然である。そして、その政策を「偽りの近代化」と批判したわけだが、このことを勸案すると、帰国後の漱石の感情的で乱暴とも思える痛烈な西洋批判は、多分に政府の主体性の欠如した西洋(近代)化政策に対する、精一杯の異議申し立ての意味合いがあったと思えなくもない。

その後、漱石は東京帝大教員の職を投げ打って東京朝日新聞社に移り、小説家の道を歩むことになる。このことに象徴されるように、漱石の人生や社会に対する価値観は、常人が思考するような常識的あるいは直線的な

ものではなく、それらの「凡庸」とは一線を画した孤高とでも形容すべき純個人主義的なものであった。つまり、何物にも左右されない確固たる自己世界を確立していたわけで、それ故、英国で世界を支配するほど強靱な「西洋」の価値観と対峙、対抗し、激しい葛藤を繰り広げた結果が、自己の精神的損傷に至ったことは想像に難くない。

このような漱石と対照的だったのが、東京帝大医学部卒業後、医官として陸軍省に入り、衛生制度と軍隊衛生学の調査研究を命じられてドイツに留学した森鷗外である。彼は当地においてドイツ軍当局や医学界から歓待され、またその研究においても結核菌やコレラの病原菌発見で「細菌学の祖」と称されるベルリン大学教授のコッホに師事するという機会を与えられ、一介の留学生では考えられないような厚遇を受けている。

また、日々の生活においても、駐独日本人外交官との親密な交流や観劇、舞踏会などへの招待、さらにドイツ文学との出会いにも恵まれ、公私にわたって充実した留学生活を送ることが出来たのである。その間の様子は、鷗外の代表的な小説『舞姫』のモデルと言われるドイツ人女性、エリーゼ・ヴァイゲルトが、帰国した鷗外を追いかけて来日するといった艶聞からも窺える。このように鷗外の留学生活は、英国で疎外感と劣等感に苛まれて悶々としていた漱石のそれとは天と地ほどの違いがあった。

このように嫌英感情の権化のような漱石であるが、さすが留学を終えて帰国する段になると感傷的になっていた。それは帰国後の回想録の片隅に次のように書かれている。「^{かつ}曾て英国に居た頃、精一杯英国を悪^{にく}んだ事がある。それはハイネが英国を悪^{にく}んだ如く因業に英国を悪^{にく}んだのである。けれども立つ間際になつて…」⁽²⁵⁾「余は空を仰いで町の真中に佇^たずんだ」。

自身の精神の安寧を破壊するほど激しく忌み嫌った英国だが、そこで2年間暮らしたという自己存在に対する愛着が、一抹の寂寥感を喚起したということであろう。しかし、考えようによれば、それは漱石が二度とこの国を訪れることはないという決意、つまり英国との決別、その結果としての「永遠の別れ」を既に心に誓っていた証左ではなかっただろう。

漱石をこのような英国嫌いにした神経衰弱は、ロンドン到着から半年余が経過した1901年(明治34)7月頃に早くも顕在化し始める。そして、彼の下宿を訪れた日本人留学生が“異変”に気付き、その情報は仲間内だけではなく駐英大使館、さらに日本の文部省にまで齎される。これが世にいう「夏目発狂説」の発端である。

その2ヵ月後、東京帝大から松山時代にかけて親交を深め、無二の親友だった正岡子規が長い闘病生活の果てに逝くという悲報が漱石の元に届いている。

そして、「夏目 発狂せり」という噂が日本で流布されていることを知った漱石は激怒し、ロンドンにおいて日夜、その情報の発信源である“犯人探し”を行っている。それが原因となって、ロンドンの留学生仲間の中で人間関係に齟齬をきたし、余計に疎外感を深めたりもしている。この情報に関しては、やはり英国に留学していた英語研究者の岡倉由三郎が「夏目狂セリ」という電報を文部省に宛て発信していることが記録に残っている。

日本にいる家族がこのような風聞に惑わされることを気遣った漱石は、しばらくして妻、鏡子宛ての手紙で「近頃は神経衰弱にて気分勝れず甚だ困り居候」⁽²⁶⁾「然し大したる事は無之候へば御安神可被下候」と伝えている。

確かに、漱石の神経衰弱は日本に誇張して伝えられたところもあるが、翌1902年(明治35)も半ばを過ぎると、文部省の受け止め方はかなり深刻だった。そこで渡欧の際、パリまで漱石と行動を共にし、その後、ドイツに留学して帰国準備に取り掛かっていた藤代禎輔に対し、文部省は「夏目精神ニ異常アリ 保護シテ帰朝セラルベシ」という緊急電報を打っている。藤代はその旨を漱石に伝えたが、漱石はそれを拒否してロンドンに居残り、当初の予定通り、1902年(明治35年)12月、帰国の途に着くのである。

この漱石の「神経衰弱」については、一高と東大で漱石の教えを受け、夫人の野上弥生子とともに漱石に私淑した英文学者、野上豊一郎が、漱石の次のような興味深い言葉を書き残している。「先生は嘗て自分に、『大学の講義を三年して居れば、真面目な人ならきつと神経衰弱になる』と云は

れた事がある、講師時代の先生の態度は全く此の一言に尽きてゐた。先生はそれほど真摯で、且つ嚴格であつた⁽²⁷⁾。つまり帰国後、東京帝大の講師として充実した日々を送っていた時でさえ、その真面目さや几帳面さ故に、漱石は自身が神経衰弱に陥っていたと証言しているのである。

このように、漱石の神経衰弱は重症だった英国留学中だけではなく、帰国してからも度々その症状が確認されている。このことから、英国における孤独感や疎外感、そして西洋コンプレックスだけが主たる原因ではなかった、あるいは神経衰弱ではなく鬱病だった、いや鬱病ではなく躁鬱病であった——など今日に至るまで諸説があるが、いずれも確たる証拠はない。

その一方で、英国留学から帰国した漱石が明治を代表する大文豪になったことなどを鑑みると、巷で喧伝されるような医学的な観点からの神経症というより、常人には計り知れない個性的な作家や芸術家、あるいは天才に散見される“特異な気質”の範疇に入る可能性も除外できないのである。

9. 芸術文化が繚乱するパリが忘れられず 「フランス留学」を熱望

芸術文化が雅やかに花開くパリ経由で一大産業都市ロンドンにやって来た漱石にとって、ロンドンでの生活が陰鬱なものになればなるほど、産業化とは対極の芸術や美術、学術に最高級の敬意を払うパリの街が懐かしく思い出されたことは想像に難くない。万博会場で、世界的に名の知れた芸術家たちの傑作を鑑賞して回った日々が、走馬灯のように彼の頭の中を駆け巡っていたに違いない。

実際、当時のロンドンには産業の工業化に邁進するあまり、実利とは縁遠い文化や芸術を軽んじていた観は否めない。それだけに、漱石の目に映ったロンドンの街はパリと比べて明らかに華やきに欠けており、それについて江藤淳は次のように述べている。

「芝居見物に出かけた金之助は、トゥールーズ＝ロートレックまがいの

煽情的な劇場や寄席のポスターをいくつも見たにちがいない」「それらはいわば『イエロウ・ブッカー』調で、パリの世紀末趣味を反映していたが、どこか微妙に薄よごれて⁽²⁸⁾いた」。つまり、ロンドンはパリとはまったく異次元の街だったわけで、そのことに漱石が失望感を抱いたことは容易に想像できる。

つまり、漱石にとってパリはそれだけ心躍らせる魅惑的な街だったわけで、そのことが常に彼の脳裏から離れず、いつしかロンドンを脱出してパリに移りたいとお願いようになる。実際、英国に渡った翌年、予定されていた2年間の英国留学の後、「フランスに1年間留学したい」と文部省に要望しているのである。

渡欧途中の項において、漱石のフランス語能力が如何に乏しいものであったかは既述の通りであるが、そんなことにはまったくお構いなしの一方的な留学願いであって、当然のことながら文部省がこのような唐突で脈絡のない要望に首を縦に振るはずはない。

聡明な漱石が実現の困難性を知らないはずはない。それだけにロンドンで精神的窮地に追い込まれた彼が、窮余の一策として「現実逃避」を計ったとも考えられる。

その一方で、漱石はその実現のために八方手を尽くしている。その最たるものが、1901年(明治34)2月9日にロンドンから投函した1通の書簡である。この書簡の宛先は「4人連名」になっており、その4人とは当時、第一高等学校校長で、後に京都帝国大学文科大学の初代学長に就任する旧友の哲学者、狩野亨吉、そして欧米留学後、東京帝国大学教授に就任する美学者の大塚保治、さらに学生時代から漱石の親しい友人だったドイツ語学者の菅虎雄と英文学者の山川信次郎だった。

そして、その書簡の内容は「僕は順に行けば来年の十月末若しくは十一月始ニ帰朝するのだが少し^{フランス}仏蘭西に行つて居たい」「どうも仏蘭西語が出来んと不都合だ」「切角洋行の序にやつて行きたいが四ヶ月か五ヶ月でいゝが留学延期をして仏蘭西に行く事は出来まいか」「狩野君から上田君に話

して貰ひたい」というものである。⁽²⁹⁾

ここに名前が見える「上田」とは、英文学者、上田敏のことである。彼は漱石と同様、東京帝大文科大学英文科を漱石の4年後に卒業した後輩で、漱石が帰国した後、漱石とともにラフカディオ・ハーン辞任の後を受けて東大講師になった人物である。また、1905年(明治38)には訳詩集『海潮音』を出版して、わが国の詩壇にフランス象徴派を紹介したことで知られ、荷風の憧れの人でもあった。

つまり、漱石のこの書簡は狩野から文部省に顔が利く上田敏に、フランス留学の労をとってくれるよう根回しをしてくれないかという依頼である。当時、一高の校長だった狩野には、それと併せて帰国後、一高でも教職に就けるよう依頼している。

その背景には、帰国後に待ち受けている夏目家の深刻な財政上の問題があったわけだが、それにしても東京帝大閥とその人脈を最大限に利用したこのような裏工作は、漱石の高潔なイメージからは想像しにくいものでもあった。つまり、それだけ漱石の自我は強烈で、自己目的の達成のためには手段を選ばないという俗人性も併せ持っていたのである。

しかし、この根回しは順調に推移しておらず、寺田寅彦宛の1901年(明治34)9月12日付けの手紙で「僕は留学期限を一年のばして仏蘭西へ行き度が聞届られさうにもない」とその実現性が限りなく低いことを打ち明けている。⁽³⁰⁾

奇しくもその2日後の9月14日、ロンドンの漱石の元に1通の決定的な書簡が届いている。それは、留学前に彼が奉職していた第五高等学校校長、桜井房記からのもので、「周旋依頼されていたフランス留学の件は不許可になった」という文部省決定の通知であった。そして、この最終決定が余程ショックだったのか、漱石はそれから8日間も経過した同月22日になって、妻、鏡子に次のような手紙を投函している。「先達桜井氏より手紙参り候」「其前桜井氏宛にて留学延期(仏国へ)の件周旋頼み置候処延期は文部省にて一切聞き届けぬ由につき泣寝入に候」。⁽³¹⁾

このように、漱石のフランス留学の夢は露と消え去ったが、だからといって彼が何から何まで英国嫌いだったというわけではない。元来、西洋風の“洒落男”でもあった漱石は、とりわけ洋服に強い関心を持っており、その点において英国製の生地や洋服の仕立ての良さ、さらに英国人の格調ある礼儀作法には一目置いていた。そして、英国は尊敬すべき世界の「紳士の国」と高く評価していたのである。そのことは、「当地の品物は高き代りに皆丈夫向に候」「中にも男子の洋服は『パリス』よりも倫敦がよろしき由成程結構に候」「小生も当地にて『フロツク』と燕尾服を作り候」という妻への手紙でも明白である⁽³²⁾。

また、漱石がロンドンに渡った翌年の1月22日、英国のヴィクトリア女王が死去した際には、わざわざ外出して黒ネクタイと黒手袋を買い求めている。これは葬儀の時に着用するためで、漱石は当日、黒装束でハイドパークに赴き、一般市民の列に混じって弔意を表わしている。

10. 帰国後、ハイカラな“英国紳士”に変身した漱石とその文学サロン

精神的苦痛の連続だった英国留学を終えて、漱石は1902年(明治35)12月5日、日本郵船「博多丸」でロンドンを出航し、翌年の1月23日、神戸港に帰着する。帰国後、かつて森鷗外の居宅だった東京・本郷の家で妻、子供たちと一緒に暮らし、その年の4月から第一高等学校の教員になると同時に、ラファディオ・ハーンの後を継いで東京帝国大学文科大学講師に就任する。

明治時代、欧米先進諸国での留學生活を終えて帰国したエリートたちは、多分にその進取の気性に富んだ異国体験に対する敬意の念を込めて「新帰朝者」と呼ばれた。しかし、彼らの中にはその体験を鼻にかけ、服装やライフスタイル、言動までが“西洋かぶれ”していると批判される者も珍しくなかった。

ドイツから帰朝した森鷗外の小説にも、その西洋の影が色濃く現われているとして、正岡子規が手厳しく批判したことは既述の通りだが、訪欧前の漱石も西洋体験を殊更強調する皮相的な欧米主義者を軽蔑していた1人であった。それでなくても漱石の場合、英国滞在は西洋に対する劣等感に苛まれた地獄のような日々だったわけで、一刻も早く日本に帰って、畳の部屋でのんびりしたいと切に願っていた。それほど“嫌英主義者”だったのである。

ところが、帰国後の漱石はこれらがまるで幻想でもあったかのように、英国紳士然とした「新帰朝者」を演じて見せる。

神戸から列車で東京に向かった漱石は多数の出迎えの中、東京・新橋駅のホームに降り立つが、あれほど英国を口汚く罵っていたにも拘わらず、その身なりは左右の先端を細く跳ね上げ、それをコスメチックで固定した立派なカイゼル髭に、体形にぴったりと合ったオーダーメイドの高級背広と高いダブル・カラー、そしてその上に上等の英国製フロックコートを羽織っており、その姿はまさに「英国紳士」そのものであった。「夏目 発狂せり」の報に心を痛めていた出迎えの寺田寅彦たちが、その姿を目の当たりにして啞然としたことは想像に難くない。

このように、殊更「英国紳士」を意識した漱石の服装は、東京帝大で教鞭を執るようになってからも変わらず、学生たちから“西洋かぶれ”と陰口を叩かれるのも意に介せず、仕立ての良い英国製の背広で押し通した。当時の受講生の中には後の作家、小山内薫や英文学者、厨川白村、歌人の川田順、野上豊一郎など錚々たる人物がいたが、その中でも漱石に可愛がられた野上は当時の授業の様子を次のように記している。

「其頃の先生の様子は一体に高襟で、高いダブルカラに、磨き立てのキツドの靴の、尖の細い踵高な奴をはいて、歩きぶりから一種のリズムを持つて居た。出席簿を読むにもすべて英語を用ゐて、Mr. 一と云ふ口吻を吾々はよく真似たものである⁽³³⁾」。

ここに登場する「ハイカラ」という言葉は、洋服に特徴的な“高い襟^{えり}”

を表わすものだったが、その後、新奇性に富んだ西洋的なるもの全般を意味するようになる。この「ハイカラ」については、野上同様、漱石の授業に出ている教え子の野村伝四は「之は当時の新婦朝者が欧米の流行であった洋服のカラーの高いのをつけて、首も廻らぬと云う様に見えたから、この種高襟の徒を侮蔑的にハイカラと云つたものだが、可笑しい事に先生も婦朝の際には矢張りその徒の一人であつた」と多少の皮肉を込めて漱石を揶揄している⁽³⁴⁾。

漱石が小説家として一躍、その名を世に知らしめるに至った『吾輩は猫である』は、東京帝大の英文科講師をしていた1905年(明治38)、高浜虚子の勧めで彼が主宰する俳句雑誌「ホトトギス」の同年1月号に掲載された。当初の題は『猫伝』で、それも1回だけの読み切りの予定だったが、同人たちの間で思わぬ好評を博し、虚子の強い推薦もあって連載の運びとなり、それが「小説家・漱石」の誕生に繋がった。

当時の文学界は、尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外という4大文豪が中核的存在で、その名をもじって「紅露逍鷗時代」と呼ばれていた。そこへ、英国からの「新婦朝者」で、しかも現役の帝大講師という肩書きを持つ知的エリートが、「猫」を擬人化させて世の中の不条理や人間の心の深奥に潜む愛憎を鋭く抉って見せるという斬新な手法で、彗星の如く登場したのである。それに加えて、誰もが理解できる平易な言葉と表現、さらに作品全体に満ち溢れている上質のユーモアと読者を虜にして離さないストーリー展開が人気を呼び、当時の文壇に大きな衝撃を与えた。

漱石の心の内を斟酌すれば、この小説の主人公である「猫」の存在、さらに物事の真実を見抜く冷徹な目は、いわば英国における漱石そのものの投影だったのかもしれない。また帰国後、日本で擬似的な西洋化(近代化)が国策として推進されているのを目の当たりにして、その虚偽性や欺瞞性を小説という虚構の世界において揶揄的に表現して見せたと解釈しても、あながち的外れではないだろう。

いずれにせよ、この小説は西洋化至上主義の風潮の中で、それに安易に

迎合しない芯の強さが淡々としたストーリー展開の中で燻し銀のような輝きを見せており、読者にとって「紅露追鷗」作品にない新鮮な魅力と映ったことは間違いない。

このようにして、英文学者としてよりも小説家として有名になった漱石であるが、その名が世に轟くのと軌を一つにして、東京帝大や五高時代の教え子たち、さらに漱石と個人的に友誼を結んだ若き文筆家志望者たちが相次いで漱石家の門を叩くようになる。そして、帰国してから3年が経過した1906年(明治39)、漱石は毎週木曜日の夜に自宅を開放して、彼らとの懇談に当てることにする。いわゆる、世に「木曜会」と称される漱石の私的な文学懇話会の誕生である。

そのメンバーは、本稿で度々登場している寺田寅彦や野上豊一郎、鈴木三重吉たちのほか、安倍能成や阿部次郎、内田百閒、岩波茂雄、そして俳人の松根東洋城や漱石死後に漱石全集の編集者になる独文学者の小宮豊隆など錚々たる顔ぶれが揃っていた。さらに、大正4年には新進気鋭の芥川龍之介、また久米正雄や菊池寛、松岡譲など後に大家になる才能溢れる若者たちに加えて、野上弥生子や平塚らいてうといった女性陣たちも加わって、わが国文学界を主導する絢爛豪華な「漱石山脈」が形成されて行ったのである。

この「木曜会」は、ブルジョアジーの支援で芸術家や詩人、作家、思想家たちを育んだパリにおける「サロン」のようなもので、同会のメンバーでもあった和辻哲郎によれば、当初、この文学サロンは「漱石に対する敬愛の共同」の場としての色彩が濃厚だった。しかし、メンバーたちが創作活動を展開して、社会的評価を受けるようになると、次第に「友愛的な結合」あるいは「知的饗宴」に変容して行ったと言う。そして、この会における漱石の様子について、和辻は「良識に富んだ、穏やかな、円熟した紳士であつた」と評している⁽³⁵⁾。

実際、この会では若き参加者たちが白熱した文芸批評を交わすことはあっても、漱石は穏やかな表情でもっぱら聞き役に徹していた。勿論、時に

は特定の作品に対して決定的な評価を下すこともあったが、それはごく稀れで、門下生の騒がしい文学談義に「猫の耳」を傾けながら、心の中では密かに彼らの文学的才能を推し量っていたのではないだろうか。そうだとすれば、漱石は可愛い「猫」ではなく、一筋縄ではいかない「狸」だったと言うべきかもしれない。

いずれにせよ、この「木曜会」は小説家志望者たちにとって、互いが切磋琢磨する最高の“学び舎”だった。そして、彼らの師であり後见人だった漱石は、フランスのサロン主宰者と同様、才能があると見込んだ門下生については、彼らの作品を同人雑誌や出版社、雑誌社などに積極的に売り込んで、彼らが世に出るのを積極的に援助したのである。

11. 西洋崇拜に生理的嫌悪感を抱きながらも 国家の擬似的近代化は洪々容認

漱石が英国滞在中の1902年(明治35)、日本は英国との間で「日英同盟」を締結している。つまり、当時の日英両国はかつてないほど親密な関係にあり、当地における対日感情も極めて良好だった。ところが、英国滞在中の漱石はこの「日英同盟」を極めて冷淡な目で眺めていた。

それは、同盟締結が噂になっていた前年の次のような記述から容易に察することが出来る。「西洋人ハ日本ノ進歩ニ驚ク驚クハ今迄輕蔑シテ居ツタ者ガ生意気ナコトヲシタリ云タリスルノデ驚クナリ」「大部分ノ者ハ驚キモセネバ知りモセヌナリ」「真ニ西洋人ヲシテ敬服セシムルニハ何年後ノコトヤラ分ラヌナリ」⁽³⁶⁾。

つまり、実際に英国で暮らしていた漱石は、英国人に代表される西洋人たちは「日本」のことをよく知らないし、また積極的に知りたいたとも思っていないと看破していたのである。その根底には、西洋による東洋蔑視が厳然と存在しているという事実認識があったわけで、それ故、1902年(明治35)1月30日、ロンドンにおいて「日英同盟」が調印された時、日本各

地で祝賀会が開催され、お祭り騒ぎが列島を覆ったことに、漱石は強い違和感を抱く。

それは同盟締結から1ヵ月半が経過した際、漱石が妻の父親で貴族院書記官長を務めた中根重一に宛た書簡に明確に表わされている。「本国にては非常に騒ぎ居候よし斬の如き事に騒ぎ候は^{あたか}恰も貧人が富家と縁組を取結びたる喜しさの余り鐘太鼓を叩きて村中かけ廻る様なものにも候はん⁽³⁷⁾」。つまり、この同盟締結で日本人が西洋の大国と肩を並べることが出来たと考えているとすれば笑止千万、これほど滑稽で馬鹿げたことはないという痛烈な批判である。これは当地で精神崩壊を招きかねないほど酷い劣等感に苛まれていた漱石ならではの、日本に対する強烈な諫言でもあった。

それでは、帰国後の漱石はこの「西洋」に対して、一体どのような姿勢をとっていたのだろうか。元々、英文学を研究していただけに、漱石の西洋に対する知識と学識は当代随一だったこともあって、「嫌英」の気持ちがあったにせよ、西洋文化に対する関心は帰国後も持続する。

それは様々な洋雑誌の購読という形で継続されており、漱石の長女、筆子と結婚した愛弟子、松岡譲によると、それらの中ではとりわけ英文の美術雑誌「スタジオ」が気に入って愛読していたという。ちなみに、この美術雑誌にロダンの彫刻写真が掲載され、高村光太郎がそれを見て衝撃を受け、フランス留学を決意したことでも知られる。

また、漱石はこの雑誌にコロエの影響を受けたフランスの風景画家、アルピニー(1819年~1916年)の作品が掲載されているのを見て、「仏蘭西の老画家アルピニーはもう九十一二の高齢である^{それ}。夫でも人並の気力はあると見えて、此間^{このあひだ}のステューヂオには目醒しい木炭画が十種程載つてゐた」と日記に書いて⁽³⁸⁾いる。

このアルピニーについての感想は、当時、漱石が持病の胃潰瘍で入退院を繰り返し、先の見えない深刻な療養を余儀なくされていた時期だったこともあって、彼の関心がアルピニーの作品そのものの是非ではなく、90歳を超えてなお精力的に作品を描き続ける姿が羨ましかったとの思いが滲み

出ている。いずれにせよ、これは一時はフランス留学を熱望した漱石の美術に対する関心が、帰国後も並々ならぬものであったことを物語るエピソードである。

漱石は西洋の地を二度と踏むことはなかったが、このように船便で取り寄せた雑誌や書物を通して西洋を研究し続けていたわけで、松岡の回想によると、漱石は如何にも勉強家らしく、それらの雑誌の随所にアンダーラインを引いたり、行間に細かい書き込みをしていたという。⁽³⁹⁾

漱石は東京帝大の学生時代、その優れた英語力で注目を集めるが、それと併せて幼い頃から培ってきた漢学の素養にも抜きん出たものがあった。正岡子規はその学識に驚嘆して、漱石を学問における「畏友」と崇めたのである。

このように、洋の東西を問わない幅広い知識に立脚した世界観を持つ漱石は、英語の達人と評価され、英国留学を命じられても、そのことで政府が促進する皮相的な近代化の先導者になるつもりは毛頭なかった。そればかりか、明治日本に蔓延る安易な「西洋崇拜」の風潮に生理的嫌悪感すら抱いていた。

これは後にニューヨーク経由で憧れのパリにやって来た永井荷風が、「フランス人でないことが自分の最大の不幸」と嘆き悲しむほどフランスに心酔していたにも拘わらず、帰国後は江戸情緒文化に傾倒して、当時の西洋化の風潮を痛烈に批判したのと軌を一にする。

漱石がこの荷風と異なるのは、荷風がボヘミア的な孤立的個人主義を貫いたのに対し、漱石は帰国後、国家と個人の間に境界線を引いて、現実的に「西洋」と相対した点である。つまり、漱石は個人的には西洋化を批判しながらも、国家的観点においてはそれを「皮相的で上滑りの外発的開化」と規定して、導入も止む無しとして、事実上、容認していたのである。

日本という国家が、経済力や技術力、さらには軍事力において圧倒的優位に立つ欧米列強と伍していくには、それがたとえ擬似的であったとしても、先進諸国の西洋的近代化を1つの過程と考えて受容することは致し方

がないというものである。その意味では、漱石は西洋主義の発展段階論者だったと言えるかもしれない。

このように漱石はその広範な教養や学識、知見、さらには体験によって、文学史上、類を見ない自己世界を築き上げ、その作品は時代の経過にまったく左右されない普遍性を今日まで持ち続けている。そのことは、俳句雑誌「ホトトギス」で漱石を世に出した高浜虚子の「其に教養ある、品格のいゝ麗しいユーモアに富んだ、機智縦横の天馬空を駆けるの概があつた」という漱石評に端的に言い表されている⁽⁴⁰⁾。これは、漱石の人間性とその文学の魅力を知悉した虚子ならではの正鵠を射た批評と言えらる。

このように、常に教養あふれる知的生活を追求し続けた漱石の行動原理は、国家や東京帝大、そして日本人という座標軸に立脚した社会的平衡感覚を維持しながらも、その根底においては何物にも束縛されない確固たる自我を貫き通したことに尽きるのではないだろうか。その強靱な自我や自意識ゆえ、常に外的なものに鋭く対峙し、その激しい葛藤と相克の結果、内なる自己の神経を著しく磨耗させたとも考えられる。まして、その相手が巨大な「西洋」である場合、自己に立脚した自我の毀損や、それに伴う深刻なコンプレックスは想像するに余りある。しかし、これこそが知識人の知識人たる所以であり、同時に逃れることの出来ない宿命だったのかもしれない。

引用・参考文献

- (1) 『十八世紀パリ生活誌(上)』、ルイ＝セバスチャン・メルシエ、原宏編訳、岩波書店、1989、29頁、40頁。
- (2) 『文学論(上)』、序文、夏目漱石著、岩波書店、2007、13頁。
- (3) 『漱石全集 第二十二巻 書簡 上』(書簡203)、夏目金之助著、岩波書店、1996、194頁。
- (4) 同、195頁。
- (5) 『漱石全集 別巻 漱石言行録』「漱石先生二題 先生と謡」、安倍能成、猪野謙二編、岩波書店、1996、320～321頁。
- (6) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1)、夏目金之助著、岩波書店、1995、25頁。

- (7) 『漱石全集 第二十二卷 書簡 上』(書簡203), 夏目金之助著, 岩波書店, 1996, 194~195頁。
- (8) 『漱石とその時代 第二部』, 江藤淳著, 新潮社, 1970, 76頁。
- (9) 「国文学」(「漱石 世界文明と漱石」第51巻3号), 「右往左往する一寸法師一ロンドンまでの漱石」, 石井洋二郎, 學燈社, 2006年3月号, 114頁。
- (10) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 26頁。
- (11) 「国文学」(「特集 漱石」第53巻9号臨時号), 「美術と漱石」, 新関公子, 學燈社, 2008年6月号, 131頁。
- (12) 同, 133頁。
- (13) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 44頁。
- (14) 「文芸春秋特別版」(「夏目漱石と明治日本」2004年12月臨時増刊号), 「丸谷才一・山崎正和 特別対談 夏目漱石と明治の精神」, 山崎正和, 163頁。
- (15) 『文学論(上)』序文, 夏目漱石著, 岩波書店, 2007, 24頁。
- (16) 『漱石とその時代 第二部』, 江藤淳著, 新潮社, 1970, 78頁。
- (17) 『漱石と鷗外』, 高橋昭男著, 新潮社, 2006, 45頁。
- (18) 『漱石全集 第十二巻 小品』「倫敦消息」(「ホトトギス」所収), 夏目金之助著, 岩波書店, 1994, 13頁。
- (19) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 106~107頁。
- (20) 『漱石全集 別巻 漱石言行録』「漱石先生の話 女」, 芥川龍之介, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 339~340頁。(21) 「国文学」(「漱石 世界文明と漱石」第51巻3号)「右往左往する一寸法師一ロンドンまでの漱石」, 石井洋二郎, 學燈社, 2006年3月号, 115頁。
- (22) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 206頁。
- (23) 『文学論(上)』序文, 夏目漱石著, 岩波書店, 2007, 25頁。
- (24) 『漱石全集 第十九巻 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 64頁。
- (25) 『漱石全集 第十二巻 小品』「思ひ出す事など」, 夏目金之助著, 岩波書店, 1994, 449頁。
- (26) 『漱石全集 第二十二巻 書簡 上』(書簡203), 夏目金之助著, 岩波書店, 1996, 263頁。
- (27) 『漱石全集 別巻 漱石言行録』「大学講師時代の夏目先生」, 野上豊一郎, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 170頁。
- (28) 『漱石とその時代 第二部』, 江藤淳著, 新潮社, 1970, 80頁。

- (29) 『漱石全集 第二十二卷 書簡 上』(書簡203), 夏目金之助著, 岩波書店, 1996, 222頁。
- (30) 同, 238頁。
- (31) 同, 239頁。
- (32) 同, 209頁。
- (33) 『漱石全集 別卷 漱石言行録』「大学講師時代の夏目先生」, 野上豊一郎, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 171頁。
- (34) 『漱石全集 別卷 漱石言行録』「散歩した事」, 野村伝四, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 182頁。
- (35) 『漱石全集 別卷 漱石言行録』「漱石の人物」, 和辻哲郎, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 366頁。
- (36) 『漱石全集 第十九卷 日記・断片 上』(日記1), 夏目金之助著, 岩波書店, 1995, 49~50頁。
- (37) 『漱石全集 第二十二卷 書簡 上』(書簡203), 夏目金之助著, 岩波書店, 1996, 252頁。
- (38) 『漱石全集 第十二卷 小品』「思ひ出す事など」, 夏目金之助著, 岩波書店, 1994, 375頁。
- (39) 『漱石全集 別卷 漱石言行録』『明暗』, 松岡譲, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 343頁。
- (40) 『漱石全集 別卷 漱石言行録』「平凡化された漱石」, 高浜虚子, 猪野謙二編, 岩波書店, 1996, 287頁。